

# 修道

No.61

題字は吉田学(高21)書

修道学園同窓会連合会  
修道学園(中・高)同窓会

〒730-0055 広島市中区南千田西町8-1  
TEL(082)241-8291 FAX(082)249-0870  
TEL(082)241-6686(同窓会直通)  
E-mail dosokai@shudo-h.ed.jp  
URL http://www.shudo-h.ed.jp/dosokai/



同窓大会での玉入れの様子

## 目次

### 同窓会ニュース

「わ」のもとに

—平成18年度修道学園(中・高)同窓大会報告—

……………小川 文象 ……1216

### 支部だより

広島修道歯科医会の近況報告…川原 正照 ……1219

広島北部支部(修北会)第3回総会開催…末次 文雄 ……1221

### 同期会報告

赤いマフラーを巻いた還暦記念同期会…山本 正一 ……1223

「修道高等学校38回同期会

卒業20周年記念総会」の開催…大成 浩二 ……1224

### 特別寄稿

第20回修寿会開催……………藤澤 洵 ……1226

石田道俊先生に総理大臣からお祝い状…河野富士雄 ……1227

全盛時代のサッカーOBが活躍…林 孝治 ……1228

山田十竹先生の日記を読む(その1)

「乙丑日記」……………畠 眞實 ……1230

### 学園だより

第59回修道高等学校卒業式 ……1237

### 人物往来

“マツダ代表”で重責……………田島 文治 ……1239

熱いシュート後輩に喝

修道中・高がOBと交流試合 ……1239

交流温か歩行横断400キロ

タクラマカン砂漠踏破…中村憲二郎 ……1239

第63回中国文化賞 受賞者の業績と横顔…土肥 雪彦 ……1240

### 訃報

……………1240

### 事務局だより

……………1241

# 「わ」のもとに —平成18年度修道学園(中・高)同窓大会報告—

高校第50回世話人会代表 小川 文 象



引き継ぎ式の様子

平成18年度修道学園(中・高)同窓大会は我々高校第50回卒業生が世話人となり、大会運営を担当いたしました。

私が2年間滞在したロンドンから帰国したのが2005年5月。日本の超現実のスピード感に未だ戸惑いながら、独立へ向け準備を進めていた7月、修道の同期生の水球部OBの友人から、電話があった。「修道の同期を集められるだけ、集めてくれ。」そうして集まったのは7人。そこで彼が切り出した。「同窓大会という会があって、来年は俺たちの番だ。そこで・・・」私をはじめ、他の6人は戸惑いの表情で彼の話聞いた。彼の話によれば、ここ数年は水球OBが代表を務めてきたが、来年はいない。そこで誰かがやらなくてはならないということだった。卒業後8年が経ち、連絡がとれる同期の間も限られた状況は皆同じで、当然な

がら名乗り出る者はいなかった。しかし「できれば昼間動ける人間がいい。自営業とか・・・」という彼の言葉で、私に皆の視線が集まり、一度は断ったものの、担がれて責任感を感じ、皆もサポートすると言うので、軽い気持ちで引き受けた。

代表としての初仕事は17年度同窓大会での引き継ぎの挨拶。そして、貫名担当副会長との初対面。参加した50回生一同が貫名副会長を囲んで、顔合わせをした際、「来年は歴史に残る同窓大会にします!」と大見得を切る。

まずは同期集めから開始し、月2ペースでミーティング。同窓大会の様々なアイデアが出て、コンセプト「わ」が決定。そして正月に卒業後初めての同期会を企画する。10人弱のメンバーで修道に集まって準備した甲斐があり、100人の同

期が集まった。

同期会が終わり一段落し、それから約2ヶ月何もなくて、3月、「そろそろヤバイよね」という皆の空気を感じ取り、再び動き始める。3月の幹事会に向け、会員券を作成。修道の吉田先生に題字を書いていただき、私がデザインした。

4月から会員券販売を開始するも、「まだ早すぎる」と先輩方に怒られることもしばしばあったが、同期会等の様々な修道関係の集まりに顔を出させて貰い、大会の告知、会員券の販売をして廻った。夏が近くなると、大会誌広告協賛募集活動も開始した。我々は自分たちで考え、計画を作り、実行していたため、先輩方から叱咤激励を受けることも多かった。何処に行っても共通するのは、修道への愛を感じたこと。先輩方の一滴、一滴の愛によって、当初は無色潔白だった私たちも修道の色に染まっていった。

そして大会が近づくと、当日運営の打ち合わせのため、しばしば世話人を招集し、ミーティングを行った。この頃の私はメールで招集をかける、完全なる嫌われ役だった。全員に役割を与え、担当ごとに活動するようになると、次第に世話人のメンバーの顔つきも変わっていった。みんな「俺たちの同窓大会をなんとか成功させたい」という気持ちで一つになっていたように思う。

そして大会当日。ギリギリまでかかった新企画の緑バッジ特集を盛り込んだ大会誌も無事搬入され、「50」とプリントされた特製バッグも良い出来栄だ。当日集まった50回世話人は約30名、51回生は約15名。全員持ち場につき、緊張の面持ちで最終確認。1年間の集大成が始まる前の、何とも言えない緊張感と高揚感が入り交じった心地よい時間だった。

この大会はコンセプト「わ」を掲げ、「日本のわ」「平和のわ」「修道のわ」を会の企画の中に取

り入れた。広島修道大学チアダンス部による浴衣を着ての演技で「日本のわ」、スクールバンド班による演奏で「平和のわ」、恒例の輪になったの校歌斉唱で「修道のわ」を体感していただき、他にも懐かしい名場面のスライド上映、そして目玉企画の修道杯2006「バッジ対抗玉入れ」と様々な企画を盛り込んだ。

無事に受付・入場が終わり、会が始まると、来ていただいた諸先輩方の顔色が気になる。皆さんに心から楽しんでいただいているだろうか。そんな心配をしているうちにプログラムは進行し、目玉企画の玉入れへ。実はこの企画、最後の最後まで皆でやるかやめるか悩んだ企画で、大会が成功するか否か、命運を懸けた企画であった。そんな事情もあり、玉入れが始まる瞬間、世話人一同の不安と緊張はピークであった。笛の合図と共に、無数の玉が投げ上げられた瞬間、私達世話人は全員最高の笑顔をしていた。この上ない達成感と喜びを感じた。こうして我々50回世話人の同窓大会は大成功で幕を閉じた。

先輩方をお見送りしていると、多くの先輩方から「今までで一番いい会だったよ」「玉入れよかったよ」「このバッグいいね」「ごころうさん」と声をかけていただき、本当に頑張ってたよとおもいました。

この同窓大会は、数多くの皆様のお力添えで成功させることができました。感謝の気持ちでいっぱいです。私自身、何度も挫けそうになりましたが、貫名副会長をはじめ先輩方の激励、そしてこれを機に培った信頼できる仲間達との友情は、私の財産となりました。これからも歴史ある修道の「わ」の心と共に、我々50回世話人一同、世のため、母校のために歩んで参ります。

ありがとうございました。



スクールバンド班によるオープニング



広島修道大学チアリーディング部による余興



玉入れの様子



肩を組んでの校歌斉唱

# 「広島修道歯科医会の近況報告」

川原正照(高校27)



第43回 広島修道歯科医会総会 H18.11.11 於 県民文化センター

広島修道歯科医会(修歯会、小松昭紀会長：高校6)は創立43年目を迎え、現在では会員数200名を超える大所帯となりました。

修歯会では総務、学術、厚生、広報、会計各部が年間の事業計画を立てて活動していますが、その一部をご紹介します。

去る平成18年11月11日(土)、恒例の総会を「県民文化センター」で開催いたしました。当日は「世界に向けて広島発の歯周組織再生サイトカイン療法確立に挑む—脳由来神経栄養因子の可能性—」と題した河口浩之広島大学大学院医歯薬学総合研究科先進医療開発科学講座助教授のご講演があり、その後の懇親会では田原俊典校長、林正夫理事長にご出席いただき盛会裏に終了いたしました。また年度の前半には定例行事として集談会が開催されますが、ここでは会員相互の意思疎通を目的としています。今年も勉強会として保険講習会を計画し、6月13日に木村一水広島県歯科医師会

常務理事(高校25)を講師に迎え開催しました。懇親行事では7月6日にカープVS東京ヤクルト戦の観戦をし、市民球場の電光掲示板に“歓迎広島修道歯科医会様ご一行”の文字が躍りました。11月5日には美和GCにてゴルフコンペを開催いたしました。

また修歯会では年に1回、会誌「修志」を発刊しており、第13号を数えました。諸先輩のお話や入会された若い会員の紹介、最近の母校の現況などを掲載しています。最新号では修道学園通信から畠眞實元校長の「新たに寄贈された山田十竹先生の遺品について」を転載させていただきました。

小松昭紀会長になって10年目の平成18年には役員を一新し、さらなる躍進を目指して頑張りたいと思います。最後に修道学園同窓会の今後益々の繁栄を祈念いたしまして、修歯会の近況報告とさせていただきます。

## 修道歯科医会役員

(平成18年1月1日～平成20年12月31日)

会 長	小 松 昭 紀			
副 会 長	前 田 哲 二	中 村 博	田 中 治 邦	
専 務 理 事	椿 田 直 也			
常 務 理 事	川 原 正 照	熊 谷 宏	久 保 康 治	
理 事(総務)	中 村 隆 之	沖 本 和 夫	佐々木 正 剛	
	大 原 省 三	渡 辺 文 衛	新 田 栄 治	
	堀 尾 弘 治			
理 事(学術)	森 田 知 夫	阿 部 泰 彦	山 中 威 典	
理 事(厚生)	森 田 薫	桑 原 雅 夫	伊 藤 光 康	
	田 嶋 真			
理 事(広報)	山 崎 健 次	毛 利 雅 哉	木 村 太 言	
理 事(会計)	寺 迫 環	二 井 亮		
監 事	松 原 弘 明	竹 腰 和 雄		
顧 問	大 江 利 夫	松 島 悌 二		
参 与	三 宅 照 男	西 本 裕		

支部だより

## 2006年 広島北部支部(修北会)第3回総会開催

日 時 2006年10月7日

場 所 広島市安佐北区可部、いこい  
末 次 文 雄 (高校17)



肩を組んで校歌斉唱 (中央は小田先生)

ひさしぶりに第三回目の総会・懇親会が10月7日、広島市安佐北区可部にて開かれましたのでご報告いたします。前半は、恩師の小田和磨会長(旧姓：久保田先生)、来賓として増原義剛衆議院議員(高校16)、今田良治広島市議員(修道大学卒)のご出席をいただき、修道学園職員の大代さんの名司会で、恩師・先輩を偲んでの黙祷のあと、小田会長の開会あいさつ、祝辞、新任会長選出、新会長による活動報告、細田雅之さん(高校17)からの会計報告、当会規約改正、役員改選、新任役員あいさつ等をとどこおりなく終えることが出来ました。小田会長には当会の顧問を、藤岡茂和さん(高校8)には新会長を、清水勇二さん(高校21)には新事務局長をお願いすることが決

まりました。

また、この種の総会ではめずらしくすぐには懇親会に入ることなくご両名の来賓から、20分間づつの時局講演をしていただき、一同熱心に聞き取りました。増原衆議院議員は、小泉内閣の功績、安部新内閣の使命、少子化対策、持論の経済論、今田広島市議員は、台風13号被害対策、道路網整備、新球場の建設案などのホットなテーマの講演で、皆さんの関心も高いものがありました。

次いで、新任副会長の平尾隆文さん(高校5)の音頭で乾杯し、待望の懇親会が始まりました。当日の参加者は来賓2名、旧制中学3名、高校20名で、先輩・後輩それぞれによく飲みかつよく

しゃべり、夜遅くまで楽しいひと時を過ごすことが出来ました。中締めには、恒例の全員肩を組んでの声高らかな校歌斉唱があり、番匠宏行さん(高校13)の閉会の挨拶を持って盛会の内に終わりました。

(修北会・広報委員からのお知らせ)

今回の総会を記念して広島北部支部のホームページを立ち上げましたので、是非ご覧下さい。支部の役員紹介、総会・懇親会・2次会のスナップ写真集、校歌斉唱動画などをご覧になることが出来ます。

[http://www.geocities.jp/shudo\\_kita/](http://www.geocities.jp/shudo_kita/)



藤岡新会長挨拶



来賓の増原衆議院議員挨拶



来賓の今田広島市議会議員挨拶



新役員紹介



平尾新副会長による乾杯音頭



番匠頭会長の閉会挨拶



# 赤いマフラーを巻いた還暦記念同期会

修道18回生同期会世話人

山本正一(高校18)

本年(2007年)は、1947・1948年生まれの私達18回生にとりましては、還暦を迎える年となりました。団塊世代だの、2007年問題だの、今まさに話題の世代であります。1966年に母校を卒業して以来、こうして還暦を迎えることはまことに感慨深いものがあります。

この「60歳節目」を飾る思い出の集いにとさる1月2日、「還暦記念大会」を中区基町のリーガロイヤルホテルにて開催しました。当日は、真野尚先生、木元俊雄先生の恩師2名と同期生64名、家族4名の合計70名の出席を得て、大盛会のうちに、楽しく懐かしいひとときを過ごしました。お互いに参加した同期生から元気をもらうことができました。また、記念品として「赤

いマフラー」と「手帳サイズの名簿」を全員に配布したところ、大好評でした。この「赤のちゃんちゃんこ」ならぬ「赤いマフラー」は、私達の母校での襟パッチの色が「赤」であったこともあり、「赤」への特別なこだわりでもありました。

そして、会の最後に、全員がこの「赤いマフラー」を首に巻いて、記念写真を撮りました。写真からもその時の和やかな雰囲気を感じられると思います。

今後、この「赤いマフラー」をしているオヤジを見かけたら、声をかけてみて下さい。私達「修道18回生」は、みなさんからパワーをもらい、第2の人生を生き生きと進めたいと思っていますので。



同期会報告

# 修道高等学校38回同期会 「卒業20周年記念総会」の開催

大成 浩二 (高校 38)



平成18年12月30日、我々修道高等学校38回の同期会を、「卒業20周年記念総会」として、リーガロイヤルホテル広島にて開催しました。

我々の同期会は、同窓大会の世話人を担当させていただいた時以来の同期会開催となり、きちんとした組織ができていませんでした。今年度の同窓大会の時に集まった同期の者で、「修道高校を卒業して20年が経った。年末に『卒業20周年』を記念しての同期会を行い、きちんとした同期会を立ち上げよう」という話になり、12月30日の開催に向けて、評議員を中心にして「準備委員会」として会合を重ね準備をしてきま

した。

当日は、昼間に同期会ゴルフコンペを開催した後、「準備委員会」のメンバーが会場に集まりました。開始時間が近づくとつれ、懐かしい顔が一人、また一人と集まりました。恩師の先生方は、学年主任の街道先生をはじめ、高校卒業時担任の糸藤先生、藤澤先生、吉崎先生、小野田先生、堀尾先生、大木先生、木之上先生がご出席くださいました。「出席者の目標100名」という数には達しませんでした。約80名の出席がありました。

懇親会に先立ち、同期会の総会が行われ、同

期会の会則承認、それに伴っての同期会役員の推薦・承認が行われました。その後、懇親会が始まりました。同期会会長の大方幸一郎君（9組）の挨拶に続き、街道先生による乾杯の音頭で懇親会がスタートしました。懐かしい顔が久しぶりに集まり、高校を卒業して20年が経った今の自分たちの姿を恩師の先生に見てもらいました。「変わったなあ」という声もあれば、「高校の時から全然変わってない」という声もある中、先生方が自分たちのことをしっかり覚えていてくださっていることに大きな驚きを感じました。懇親会の中で、先生方に一言ずつありがたいコメントをいただきましたが、さながら授業を受けているような懐かしさを感じました。

盛況のうちに2時間半という時間はあっという間に過ぎました。全員で輪になっての校歌斉唱、そして先生方の中で最もお若い木之上先生による万歳三唱で閉会しました。その後、ホテルの1階ロビーに移動し、全員で記念写真を撮影した後、散会しました。

出席してくださった先生方、準備委員会のメンバー、出席してくれた同期生のみんな、どうもありがとうございました。来年の12月30日の同期会でまた会いましょう。

最後にお願ひです。高校38回卒業生のホームページがあります。ぜひご覧いただき、1人でも多くの同期生に会員登録していただければと思います。よろしくお願ひします。



特別寄稿

# 第20回 修寿会開催

藤澤 洵（高校6）

退職教職員の集まり「修寿会」（会長・小田和磨、副会長・余語光子、河野富士雄、幹事・中山眞一、橋谷秀雄、藤澤 洵、会計監査・川野観治）の第20回総会・懇親会が、さる10月14日（土）、鯉城会館（県民文化センター内）において行われました。

本年度は、3人の会員（脇本 剛、中村 法、

脇田久二）がお亡くなりになり、4人の新会員（高橋俊夫、玉置勝之、田阪信彦、大 純一）をお迎えして、会員数は88名となりました。最高齢会員は、2007年1月18日に100歳の誕生日をお迎えになる石田道俊先生です。

今年は19名の会員が出席し、なごやかな歓談のうちに大いに旧交を温めました。



平成18年度 第20回 修寿会 於 県民文化センター

- |    |    |    |     |    |    |     |    |     |   |
|----|----|----|-----|----|----|-----|----|-----|---|
| 有田 | 木村 | 仲井 | 山木戸 | 藤澤 | 橋谷 | 吉崎  | 原本 | 玉置  | 島 |
| 相良 | 望月 | 木元 | 河野  | 小田 | 中山 | 田中正 | 保澤 | 田中肇 |   |

# 石田道俊先生に総理大臣からお祝い状

河野 富士雄 (高校4)

本年1月18日に満百歳の誕生日をお迎えになった石田道俊先生(昭和22年11月～41年3月 社会科 旧中15回)に、昨年の敬老の日に当時の小泉純一郎内閣総理大臣からお祝い状と銀杯が贈られました。伝達行事は9月19日、石田先生が生活しておられるグループホームはるかぜに総理大臣のお使いである県職員の方2名を迎え

て行われました。先生の末のお嬢様と甥御様、はるかぜのお仲間と職員の方、それに教え子代表の3人など30名ばかりで楽しいお茶の会となりました。先生はたいへんお元気で、いと厳かな面持ちでお祝い状を戴かれたあとはいつものようにユーモアたっぷりの語り口で周囲を笑いの渦に巻き込んでおられました。



特別寄稿

# 全盛時代のサッカーOBが活躍 (サッカーに年齢はない)

林 孝 治 (高校2)

第19回全国福祉祭しずおか大会 (ねんりんピック静岡2006) は、平成18年10月28日(土)より31日(火)まで、静岡県内の各会場に分かれて、各種目が開催されました。

総合開会式は、静岡スタジアム・エコパにて、常陸宮殿下・同妃殿下をお迎えして、盛大に行われました。

サッカーは、総合開会式終了後、ビンテージ・サッカーマッチが行われ、元日本代表と静岡県・市の選抜チームの試合が行われました。今年初めての行事で、楽しいサッカーを見学することができました。

修道からは、東京・メキシコ両オリンピックで活躍をした、高校14回卒の「森 孝慈」選手が出場しました。

翌29日(日)には、静岡会場 (トレセン東・西、総合運動場、日本平) と磐田会場 (安久路公園、ゆめ多目的、竜スポ公園、ゆめサッカー) に、それぞれに分かれ、各県、各政令都市別の対抗

で、各12ブロックにて、各4チームのリーグ戦方式で行われました。

修道サッカーOBは、全国より9名が参加いたしました。

東京大江戸 (藤田)、千葉県 (若山)、広島県 (石井、脇、大内)、広島市 (林、高瀬、中野、藪) が、各対抗戦に出場しました。

勝敗が同じになった場合は、得失点差にて勝敗を決定されます。

東京大江戸は「金メダル」、広島県・広島市は「銀メダル」、千葉県は「銅メダル」と決定しました。

来年の平成19年は、茨城県で20回大会が行われます。

昨平成17年に、福岡大会で活躍した東京大江戸の竹内民雄選手は、来年平成19年には千葉県の若山待久選手と一緒に出場することになると思われます。





ピンテージサッカーに出場した(往年の日本代表)森 孝慈(高14回)



左から 林 孝治(高2回) 若山 待久(高14回)  
中野 一美(高9回) 高瀬 正明(高9回)  
藪 正悟(高17回)



左から 脇 洋一(高15回)  
石井 正則(高6回)  
大内 晟(高11回)



藤田 勉(高13回)

## 競技組合せ表

### Aブロック

チーム名	1 札幌市	2 千葉県	3 愛知県	4 広島市	勝 点	得失点	順 位
1 札幌市		0-4	0-10	0-8	0	-22	4
2 千葉県	4-0		0-5	0-1	3	-2	3
3 愛知県	10-0	5-0		1-1	7	+15	1
4 広島市	8-0	1-0	1-1		7	+9	2

### Gブロック

チーム名	1 岩手県	2 石川県	3 名古屋市	4 広島県	勝 点	得失点	順 位
1 岩手県		4-1	1-3	2-5	3	-2	3
2 石川県	1-4		1-2	0-3	0	-7	4
3 名古屋市	3-1	2-1		4-2	9	+5	1
4 広島県	5-2	3-0	2-4		6	+4	2

### Iブロック

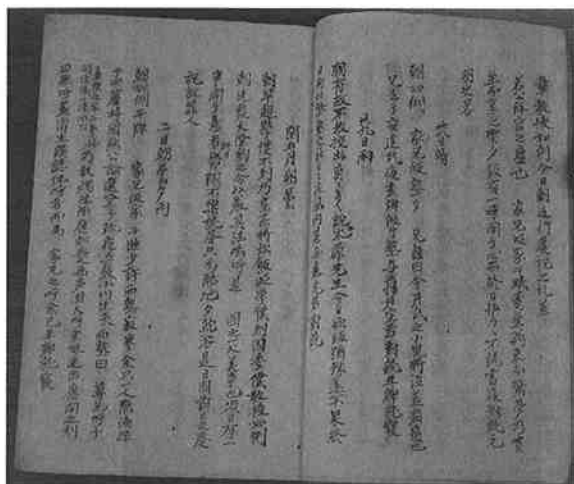
チーム名	1 山形県	2 東京大江戸	3 大阪府	4 鹿児島県	勝 点	得失点	順 位
1 山形県		1-5	0-3	0-5	0	-12	4
2 東京大江戸	5-1		2-0	6-1	9	+11	1
3 大阪府	3-0	0-2		2-3	3	0	3
4 鹿児島県	5-0	1-6	3-2		6	+1	2

特別寄稿

山田十竹先生の日記を読む（その一）

「乙丑日記」

修道学園史研究会 島 眞 實（元校長・高校7回）



山田十竹先生の日記について現在修道中学校・修道高等学校で保管されているのは9冊である。そのうち5冊は、平成16年5月に山田十竹先生の三男山田有秋氏のご子息山田弘秋氏から寄贈されたものであり、この「乙丑日記」は、この5冊のうちの一冊で、保管されている9冊のうち年代的には一番古い。「乙丑」（きのえうし）の年、すなわち元治2年・慶應元年（1865年）[この年4月18日に慶應に改元されている。]の4月1日から12月29日までの日記である。日記の表紙に「山田十竹」と記されている。「十竹」という名前について他にその例をみないが、書かれている内容、保管されていた状況から考えて、山田養吉先生であると考えて間違いのないものと判断される。この年、山田先生は33歳で、学問所寄宿舎塾頭を務めておられたと思われる。（1863年に学問所寄宿舎塾頭となるとある。）[当時広島藩藩主は浅野長訓（在位1858～1869）。

浅野長勳は1862年（文久2）12月に浅野宗家の世子（諸侯の後継ぎをいう）となっている。]

先にこの日記が一番古いと述べたのであるが、これより以前の、すなわち先生が33歳以前の日記はどのようなものであったかということはいわゆる関心のもたれるところである。このことに関しては、「乙丑日記」と共に今回寄贈された「十竹軒日録」（明治元年 [1868] 8月1日から途中欠筆があるが、明治4年 [1871] 9月14日まで）の中の記述が目玉される。この「十竹軒日録」は8月1日から書き始められているのだが、書き始める前の部分に次のように記されている。「余日録已に六七歳理む（ととのえる）。行事、経歴略具う。（自分は日録をすでに6、7年つけており、行事や経歴などほぼ書き留めている。）」これによると、明治元年（1868）より前の6、7年間日録が書かれていたということになる。それでは、これがどのようなものになったのかという



ことについては、これより少しあとの箇所のように書かれている。「〔慶應四年(1868)〕二月十七日西に帰る。(山田先生は慶應二年学生を引率して江戸にのぼっている。)蓄えたる所の書、史経巻、および手録する所の雑著、一切之を海運船に付す。」とあり、つまり書物や書き記したものをすべてを船便に託して送ったというのである。しかし、さらに読み進むと、「〔慶應四年〕四月十八日、田中覚太郎書を遺つて云う、海運船豆州の海に没す、と。嗚呼、余結髮(男子は二十歳より髪を結んだ。)より集緝する所、心血を注ぎし所、一切之を海岩に付す。何ぞ之を甚だしく弔せざらんや。」と述べられている。これらの記述からすれば、江戸から広島へ船便で送った、元服以来書きためていた日録、書物、手記など一切を海運船の沈没とともに失ったということである。山田先生が非常に悲嘆されていることが伺える。先生のみならずわれわれもこのことをきわめて残念なことに思う次第である。

さて「乙丑日記」の内容については、この日記の一番終わりの部分、つまり12月29日の記述が一応参考になろうかと思ひ、まず紹介しておきたい。

十二月廿九日 晴又曇

「(前略)終年碌々として(平々凡々として)為すこと有らず。五月以前幸いにして学塾の在る故を以て、勉強すること能はずといえども、学〔事〕に従事す。しかるに絃誦の声(学芸に励むようす)耳に断えず。心亦自ずから他に在らざるなり。五月以降不幸にして学塾解退し、日に学校に赴けども徒に人を益するのみ。すでに半日を没して帰れば、則ち俗間の事亦為さざる能わず。是を以て碌々として日月を費やし、憤懣に堪えず。八月以後、乃ち文章を学ばんと欲す。余力有れば則ちなす。漸く十九文を暗ず(暗記する)。蓋し(考えてみると)また少なし。後に又大いに慨し(嘆き)以て〔暗記ヲ〕為す。我苟も(かりにも)皇国の一武徒(武士の仲間)なり。則ち、武技無くんば能はず。精しくその術を〔ヨクスル〕能はずといえども、すでに槍

を学び、また剣を学ぶ。今また馬術を学ぶ。しかるに是皆一人の従事に敵ふところなれば、則ち学ぶこと在るを果たすなり。慶應元年乙丑之除夜、十竹軒に酒の間に書く。」

先生がこの年を振り返り自らの思いを概括して述べられている。「五月以降不幸にして学塾解退し」という記述がどのような具体的な事実を踏まえてのことなのか、日記の内容からそれを読み取ることはできない。また「すでに半日を没して帰れば、則ち俗間の事亦為さざる能はず。」という記述は、学問の道を勤しみながら、塾頭として日々の日常生活におけるあれこれに心を用いる苦勞があったのであろう。

「剣を学ぶ。今また馬術を学ぶ。」と書かれているが、それを裏付ける記述はしばしば見られるところである。例えば「試刀三百」「朝城南埜に赴き調馬す」などである。

日記の内容の多くの部分は、師および同僚との交友に関して記されている。時に時局や世事に関しての記述も。先生はよく酒を嗜まれたと伝記・略歴に記されているが、そのことは日記にしばしば書かれており、なるほどと頷かれるところである。また「萱堂」(母のこと。昔、中国で母は北の座敷を居間とし、萱草を植えたことからいう。)という文字も多く。先生は母上によく孝養を尽くされたといわれているが、それを示すものとも言えるであろう。

それでは、「乙丑日記」の書き始めの箇所から拾い上げて読んでいくことにしよう。(紙面の都合もあり、全てを載せることはできないので、抜粋したが、一つのしっかりした基準に従ってのものではなく、きわめて恣意的であると言える。大まかに先生の生活の様子を捉えていただければという思いである。)

四月朔 晴

朝結髮。学校に出づ。午刻(正午)帰る。終日忽々として(ぶらぶらとして)為す有る能はず。夜市に至り、物を除ふ。

\*結髮 髪を結うこと。散髮・廃刀が許可されるのは、1871年(明治4)8月9日である。

二日 晴

朝、出入例の如し。未刻（午後2時）、東講武場馬埒（馬場）に至る。夕に及びて帰る。食後仮眠す。覚えぬ夜に及ぶ。戌刻（午後8時）上月氏に至り、萱堂の帰るを迎ふ。萱堂遂に帰るを得ず。独り帰る。寝ねて朝に至る。萱堂乃ち帰る。

三日 朝晴夕雨

朝、出入例の如し。未刻、松島君と市に至る。事を弁じ（用事を処理し）、帰路星野氏に到る。晩、家兄（他人対して自分の兄をいう時のことば）と小飲す。

（中略）

六日 晴

朝、出入例の如し。午刻、松島君来たる。蓋約（約束のとおり）護良親王伝を読まんためなり。共に臥して語る。覚えぬ眠りに就く。未刻（午後2時）、杳内君来たる。共に覚む。親王伝を読む。両君帰りて、浴に就くを止めて、字一枚写す。夕飯を食す。杳内君来たる。共に今日の眠りの奇なるを笑ふ。共に読書す。子刻（午前0時）、杳内君帰る日乏、学館よりの報に曰く、明日大祖の忌日（浅野家初代長政の命日、慶長16年〔1611〕4月7日没）なり。故に学館稽古無し。ならびに他の稽古皆無し。使帰りて乃ち門を閉ざして寝ぬ。蚊多くして寝ぬべからず。因りて、面に衣を覆ふ。稍、寝るを得たり。

七日 晴曇相半

朝、萱堂通（孫の名か）を携へて踏青（「青」を「踏む」春若草を踏んで郊外を散歩する）す。巳刻（午後10時）、松島君来たる。共に話す。午刻、君帰る。飯を喫し、上月氏に到る。帰りて、松島君又来たりて、共に行くことを請う。余事有りて行かず。君帰り、又来たる。余視るに朱を以てす。申刻（午後4時）、又来たる。余為すに朱を以て槍及び鎧を塗る。申刻後、独酌し、飯を喫せず。巷に出で萱堂の帰るを待つ。因りて、黒松子に到る。傾刻にして（しばらくして）萱堂既に帰りしを思ふ。將に帰らんとするに（黒）松子留めて帰らしめず。乃ち刀を脱して（抜き取って）

以て質（担保）と為し、再来し帰面を期す。萱堂又黒松子に到る。松子置酒（酒宴の準備）して余を待つ。傾刻にして睡に就く。松子余を搦ぐ。以て到り就寝せしむ。余困酔し、如何なりしを知らず。明朝之を聞き、始めて大酔を知る。

（中略）

廿二日 曇晴相半

朝結髪。今日に入塾す。夜、塾諸君左伝（「春秋左伝」の略称）を対読す。明日講筵（講義の席）に待すべき爲なり。

※「対読」一句読師が三、四人の学生を引き受けて個別に指導した「素読」のことをいうのか？

廿三日 晴

朝辰刻（午前8時）起く。飯を喫して、即ち講堂に出づ。今日森君故有りて到らず。余独り二十六名に授く。

未刻（午後2時）登城し若君（長勳公）の講筵に待す。申刻（午後4時）後、塾に帰る。夜睡魔荐に百方に至り、去らず。子刻（午前0時）に及び、数書を読む能はず。

廿七日 朝夕雨

朝、若君学校に到りて聴講。桑宅（木原）先生の講なり。

\*木原桑宅（1816～1881）儒医。藩儒坂井虎山に学び、高弟となる。尊王を説いて幕政の基本を改革するように主張した。

廿八日 晴

朝例のごとし。夕、塾の炊番の故を以て読書する能はず。夜、読書。寅刻（午前4時）、就寝。

廿九日 晴

朝、結髪。講堂に出づ。午刻（正午）、沐浴を以て家に帰る。飯を喫して仮眠す。木原兄来たる。共に飯田氏に去き、調馬（馬を乗り馴らすこと）す。申刻（午後4時）、一場子（男子の敬称）と與に午刻馬を誥らせて村山氏に去く。帰りて則ち萱堂上月氏に去き、駒郎の初祭に会す。余も亦上月氏に去く。黄昏萱堂に先んじて帰り、独

り種竹十箇軒に酌む。家兄の帰り既に点燈。兄尚帰らず。因りて筈を携へて片田氏に到る。片田(山田先生の弟)氏より亥刻(午後10時)に歸りて就寢。

晦日 晴

巳刻(午前10時)、加藤兄、片田姪至る。余家兄の爲に結髮。既に終り家兄及び二氏と十竹軒に酒を酌む。

傾刻にして二氏去る。家兄煙波(江波のことか?)に到る。余松島氏に去く。午刻(正午)歸り、喫す。時に萱堂臥虎山(比治山のこと)の駒郎の墓を拝す。余午刻(正午)飯を喫して後、安藤氏来たる。共に二葉山辺に去き、共に馬を驅る。未刻(午後2時)、塾に歸る。藤(安藤)兄も亦到る。兄去る。仮眠申刻(午後4時)前に到る。時に岡村生余に語るに、昨夜の塾の火災を以てして曰く、五、四名(かや)入燈し、書を読み覚え皆熟睡す。寅刻の比、石川生面に熱を覚えて之を見るに大火衝き(つきあがって)、塵煙を承け、焰室に満つ。躍りて出づ。櫛開く暇あらず。障子之を破るに、其の音に驚きて他生(ひと)齊しく急なるを覚え、櫛を引きて之を下ろし、褥を以て火を覆う。火盛んにして此を覆えば、則ちかの覆いを出づ。かの出づるを殆ど救ふべからず。乃ち又一大被(大布団)を以て之を覆ひ、褥を以て庭に投ぐ。時に中尾生急ぎ井を汲み、灑ぐを以て漸くにして止むるを得。櫛及び褥数枚焼くと云ふ。嗚呼、塾一大屋にして講堂に連なる。堂竹館に隣して、全面乃ち内城なり。若し塾にして火有らば、講堂又従ひて(せん)殲す(やけつくす)。講堂にして殲有れば則ち内城竹館亦殆し。内城竹館にして火有らば、余輩安然たるべからず。生居(塾生のすまい)死して(用をなさなくなつて)余、罪有り。嗚呼、慎まざるべけんや。納燈櫛(かやの中に燈をもちこむことか)非にして、已に餘は皆禁ずべきなり。時に語りて黄昏に及ぶ。夜、丑刻(午前2時)就寢。

(中略)

五月

七日 曇晴相半

朝、老君(長訓公)若君(長勳公)学校に到り、頼(元啓、頼山陽の孫・聿庵の子)先生の講を聴くなり。講終わり、余教授例の如し。午眠少時。炎熱人に迫る。夜、子刻就寢。通宵(よどおし)快眠を得ず。蓋し櫛裂け、蚊多く入りて面を螫す。且つ蚤乗じて内に之るなり。

八日 曇晴相半 夜大雨

朝例の如し。堀先生の講を聴く。午眠未刻(午後2時)に至りて起く。子刻櫛を補綴(破れたところをつづる)し、就寢。

(中略)

閏五月 \*閏月 大陰曆で、12月のほかに加えた月

八日 晴 風

朝、故有りて学校に走らず。十竹軒を掃除す。笈案(未詳)を安置す。以て読書に便ず。午飯の後小眠。小川生「黄葉夕陽村舎詩集」(管茶山の詩集)三巻を携えて来たる。去りて又復大眠す。申刻(午後4時)に到る。夜、杳内君来たる。共に読む。八鼓(午前2時)君去る。

(中略)

十一日 晴

朝、例の如し。河野小石君の大学の講を聴く。眠りに堪へず。乃ち席に歸り、仮眠す。講終り、諸君と歸る。午後桑宅先生の宅に去く。先生を助けて教授す。蓋し先生余に助けを求むるなり。黄昏に及び歸る。夜、書を見る。

\*河野小石(1823~1895)頼聿庵に学び、藩儒となる。世子(長勳公)の侍講となる。

(中略)

六月朔 雨

此の月や、霖雨(ながあめ)止まず。稲梁(いなとのおおあわ:こくもつのこと)長ぜず。萩花開く。秋蟬鳴く。藤花(ひら)発く。風景秋の如し。且つ竹実有り。実非常の変、飢饉の兆なり。我恐る、今や天下頗る擾々

(みだれるさま)之に加ふるに飢饉を以てす。  
之に因り流民転徙(あちこちうつりゆく)  
実に天下四分五裂の始めなり、と。盜賊蜂  
起すれば則ち恐れざるべけんや。

朝、学館に走る(いそぎいく)。至聖先師の像  
(至聖先師孔子神位の木主・重晟公の筆になるも  
ので、学問所の象徴とも言うべきもの。山田十  
竹先生が〔明治19年〕、淺野家が「修道校」の経  
営を廃止する際に下付された。現在修道中学校  
・修道高等学校記念品室に保管されている。)を  
拝す。終はりて例の如く教授す。午後松齋君  
と橋本氏服部氏に到る。転じて君(松齋)安藤  
氏に到る。余丸山氏に到る。又片田氏に到る。  
此の日国主祭の節にして街市憧し。片田氏より  
加藤氏に到る。又安藤氏に到る。黄昏帰る。独  
り十竹軒に酌む。五鼓(午後八時)家大人(家  
長)帰る。余就寝の後家大人帰る。  
(中略)

十二日 晴  
朝、上月氏に過る。先生吉田に赴くを送る。後に  
学校に去き、輪講(塾生が数人で輪番で順々に  
講義すること)児玉君、午後水練場に過る。夕、  
酒店に過る。夜、家大人と枇山詩集を写す。時  
に加藤兄来たる。乃ち共に小飲す。子刻、去る。

十三日 晴  
朝、例の如し。会読(討論形式の授業)。午刻後  
十竹軒を掃除す。蓋し家大人同僚と会す。公事  
を誼るなり。昼夜忽々として為す有る能はず。  
然るに同僚四十七士の一、武林君の遺杯及び往  
復の手柬(書簡)を以て視る。余一覽し、三歎  
す。涙亦之に従ふ。子刻同僚去る。  
(中略)

廿四日 晴  
朝、例の如し。講釈(本文の主意を十分説明し、  
一字一句の瑣細なことには及ぶことなく、全体  
としての意味を理解しやすいようにすることが  
肝要とされた。)。水練場に赴く。帰りて又飯田  
氏に赴く。夜、萱堂に侍して清正公の社に謁す。  
(中略)

二十九日 晴  
朝、例の如し。玉振堂に赴く。帰路、桃源に游  
ぶ。夜、松齋兄と白神社に饗す(お参りする)。  
夏越の礼を視る。

(中略)

七月朔  
朝、例の如し。至聖先師の像を拝す。水練場  
に赴く。加藤氏到る。夕、家大人と十竹軒に傾杯  
す。夜、又共に国枝氏に赴く。  
(中略)

廿十三日  
疾熱甚だしく臥して褥に就く。起く能はず。後、  
十三日日記録す能はず。七月(八月の誤記か)  
五日記す。  
\*廿四日から八月四日まで日付のみ記されてい  
る。

八月五日 雨  
疾癒え、始めて起きて坐し、読書す。丁祭(孔  
子をまつる祭り。陰曆2月、8月の月初めの丁  
の日に行う。)疾の故を以て赴くこと能はず。夜、  
始めて試みに歩き、山中氏に赴く。山中氏蓋し  
余の疾を療せし医なり。

六日 晴  
結髪。夜、団魚(スッポンの異称)を煮る。加  
藤子余の疾を問ふて来たる。此の日森君来たる。  
小川生、服部生余の疾を問ふて(病氣見舞いに)  
来たる。

七日 晴  
朝、学校に趨き、木原先生の論語を講ずるを聴  
く。午眠。上月氏に赴く。又隣の爲積氏に至る。  
夜、読書。亥刻(午後10時)、入禱。

八日 晴  
朝、例の如し。早く起き、山中氏に赴く。余の  
爲に脈を診て、曰く、疾悉く癒えたり、と。一、  
二日薬を服すも、服さざるも亦可なり。余大い  
に喜びて帰る。太田氏に赴く。午後松齋兄、杏

内生と金子氏を弔す。蓋し霜山先生の月の二日 (8月2日)を以て没すなり。帰路又共に先生の墓を瑞泉寺に拝謁して帰る。

\*金子霜山(1789~1865) 広島藩の藩学者。山田養吉の師。特に易を深く研究した。

\*瑞泉寺 一般には「瑞川寺」と書かれている。広島市東区山根町にかつてあった。当時は、広島で最も古い寺の一つであったという。毛利時代厚くもてなされていたが、その寺運が衰え、浅野氏の時代、国泰寺の末寺となった。現在は中区小町にあった聖光寺と合併(1975年)して、寺号も聖光寺となっている。金子霜山の墓と山田養吉撰の顕彰碑について、2006年11月に訪れたとき、住職に尋ねてみたが現在では、不明とのことであった。

(中略)

廿三日 晴

朝、例の如し。試刀(刀の素振りのことか)四百。前に四千に通じて業を卒ふ。

\*試刀百とか二百とか、という言葉が何度か記されている。その合計が四千に及び目標に達したというのであろうか。

(中略)

九月八日 晴

朝、例の如し。佳節(9月9日の重陽の節句)前一日を以て夕べ、家大人と傾杯。

九日 晴

朝、結髪。家を挙げて賀杯を傾く。夜、上月氏に赴く。

(中略)

十六日 晴

東照宮大祭を以て復た諸行事今明日廃す。夜、萱堂に侍して市に去く。

\*東照宮 広島市東区二葉の里にある。祭神は徳川家康の霊。浅野光晟の時代幕府への忠誠心を示すために造営された。(1647年)

(中略)。

廿五日 晴

午後管公の廟を尾長に謁す。黄昏、帰る。時に中西二漢来たる。

\*尾長天満宮 広島市東区山根町にある。1640年に建立。祭神は菅原道真の霊。

廿六日 晴

朝、例の如し。午後左伝を学校に読む。黄昏、冷 酒 (冷や濁り酒) 数杯を傾く。夜、覚えず惰眠。

廿七日 晴

朝、例の如し。午後、城に登り、若君の講筵に侍す。黄昏帰る。夜復た惰眠。

廿八日 晴

朝、例の如し。夜、秋社前一日(秋の祭の一日前)を以て大兄と酌む。家大人を中村に迎へて帰る。

\*社日 広く春・秋の鎮守の祭りのこと

廿九日 夜雪

朝、結髪。木原氏に去く。先生の疾を問ふ。黄幡神を拝す。帰りに白神社に去く。黄昏、山下氏に去く。大いに飲酒し、山下氏共に白神社に去く。大酔して覚えず帰る。

\*白神社 毛利・福島時代には、広島総氏神であったと考えられる。

十月

朔日 朝勉めて起く。餘醒未だ消えず。羽衣及び袴、或ひは泥に塗れ、或ひは裂く。其の状酔ひて泥中に倒れしもの如くにして余皆忘却す。噫、飲酒して乱に至らざれば則ち可なり。余飲酒する毎に殆ど一升。是の過ち有る所以なり。今よりの後、誓ひて酒を禁じて父母兄弟の心を安んずるのみ。噫、飲酒の欲楽女心にして患となる。是れ之を飲まざるの樂に如かざるなり。且つ大丈夫にして口腹の役する(口や腹のためにのみつとめる)所と為るも亦た甚だしく愧づべきなり。今よりの後、酒を禁ずる能はざれば、則ち寧ろ腹を剖きて死すのみ。

慶應元乙丑十月二日 記す

山田迪吉

(中略)

七日 晴

君公学校に臨む。近日將軍將に又長（州）の罪を討たんとす。頻りに糧（兵糧）を運び、兵を召す。昨、急報有り。急報京師より来たる。未だ何状かを知らず。是の日川合三君学校に至りて、語りて曰く、昨日の急報、將軍突然京師を退きて未だ能く何状の謀か知らず。必ず長〔州〕の強を畏怖して帰るなり。抑も何ぞ其の怯たるや。是より後、諸藩將に往々幕命を用ひず。爲に割拠するなり。噫是独り徳川の衰に非ずして天下の大乱と為るなり。噫、学益<sup>ますます</sup>勤めざるべからざるなり。夜、高間、山中氏に去く。

（中略）

十一月

二日 晴

家大人 及び同僚府中に兎一<sup>と</sup>を獲る。

（中略）

十九日 晴

朝、例の如し。午後飯田氏に去く。木馬に跨る。結髪。明日八木に獵す。故を以て夜至れば、則ち即褥に就かんと欲す。家大翁に会ひ、田中某を提して（ひきつれて）帰る。置酒し談論す。又、渡氏某来たりて家大兄の寢（くつろぐ部屋）に就きて談ず。故を以て巳刻（午前10時）前漸く被（ふとん）に就くを得。丑刻前後諸君に同行す。皆我が宅<sup>あつま</sup>に萃る。然るに初め丑刻に共に行き来て到を約す。寅刻（午前4時）未だ到らず。則ち之を捨てて去く。日通寺の津（渡船場）を渡るに及びて、四生漸く及び乃ち去く。

\*日通寺 淺野光晟の夫人（自昌院）の願いによって1692～1695年に建立された。日通寺の寺名は淺野綱晟の法名天心院微性日通による。

廿十日 晴

尽日林丘を跋渉し、遂に狡兎二を得て帰る。巳刻（午前10時）漸く家に至り、就浴し飯喫し、臥す。

廿十一日 晴

朝例の如し。午後諸君子と会読す。兎を屠<sup>ほふ</sup>り、肉を分く。夜、服部氏に赴く。

（中略）

十二月

七日 晴

朝、例の如し。征長（州）の諸侯我が府下に集ふ。今日井伊侯来たる。杳内生と之を覲る。遂に伊藤氏に赴く。申刻帰る。夜、読書。

（中略）

十五日 雨

朝、山中碩来たりて切脈（漢方で、脈をおさえて診察すること）し、色（顔いろ）を覲て曰ふ。是寒熱の相搏<sup>う</sup>つなり。乃ち置薬して去る。夜、瞑目し文を思ひ、丑刻に到る。就眠。

（中略）

十八日 朝曇夕雪

朝城南埒に赴き、調馬す。午後文を暗誦す。夜、置酒。蓋し立春を賀すなり。余豆を撒く。因りて撒豆説を作る。

（中略）

廿十九日 晴又曇

朝、調馬。歸路市に赴き、馬を賒<sup>か</sup>ふ、利安<sup>か</sup>し（値段が安い<sup>か</sup>の意か）。午後山下氏に赴く。夜、家を挙げて除夜の杯を挙具。又萱堂と市に赴く。

\*人名については、どのような人なのかを明らかにすることができなかつたものが多い。  
\*意味を定めがたい箇所もある。

以上のような点が多々あり、不十分な紹介に終わっていることをお詫びしたい。今後引き続き山田十竹先生の日記を読んでいく中で、少しずつ解明したいと願っている。

# 第59回修道高等学校卒業式



卒業証書授与

第59回修道高等学校卒業式が平成19年3月3日(土)午前10時から大講堂で举行され、276名の卒業生が巣立った。

式は清原真琴学年主任が卒業生一人一人の名前を読み上げ、田原俊典校長から卒業生代表安達弘貴君に卒業証書が手渡された。

学校長式辞の後、林正夫理事長、藤田一幸PTA会長、大田哲哉同窓会会長から祝辞が述べられた。

在校生代表金子大倫君の送辞、卒業生代表上谷学君の答辞に続いて家敷貴裕君から卒業記念品(教学の目標を記した額)が学校長に贈呈された。

私学連合会長賞には山田貴弘君が選ばれ、続けて校長賞も受賞した。

皆勤賞の受賞者は以下の通りである。

## 〈皆勤賞 6ヶ年〉

谷田 幸宏 根木 達成 小松 正治  
島原 秀明 近末 智雅 庫井 俊輔

渡部 宙紘 三木 崇弘

## 〈皆勤賞 3ヶ年〉

神田 純一	竹之内 誠	田中 大翔
廣隅 友治	金平 典之	川崎 寛志
世羅 晃将	野田 斉	花園 雄三
三浦 貴大	力山 和晃	若宮 慶也
岡本聡一郎	上谷 学	谷本 匠
佃 文蔵	沼座 遼太	筒井 泰之
新原 健介	中本 大俊	矢野 貴裕
香川 紘範	島原 孝明	玉本 誠一
岡本 貴行	竹川 行	

## 同窓会会長祝辞

修道高等学校第59回卒業証書授与式にあたり、修道学園中・高同窓会を代表いたしまして、ひとことお祝いの言葉を述べさせていただきます。

皆さんご卒業おめでとうございます。

本日でたく卒業された皆さんを、我が同窓

会にお迎えできましたことは、同窓生一同心からの喜びであります。

この度の栄えある卒業は、皆さんの日々たゆまぬ努力の結果であることはもとより、これまで慈しみ、育ててこられた保護者の皆様や校長先生をはじめ多くの教職員の方々の献身的なご指導によるものであることも忘れないでいただきたいと思えます。

ご存知のように同窓会は、同じ学園生活を送った人々が世代を超えて縦横に結びつき、会員相互の親睦と母校の発展を目的として日々活動を続けております。

幾多の同窓生は政治、経済、文化、法曹、教育、医療等のあらゆる分野で活躍をされ、わが国はもとより広く国際社会において貢献をしておられます。これらの同窓生が相集うために関東、近畿など全国に12の支部があり、また多くの職域や運動班、文化班のOB会等の同窓会組織があります。今後皆さんは全国各地に進学し、各界で活躍されることになると思いますが、どうか地元広島はもとより他の地域や職域の同窓を訪ね、積極的な交流を図ってください。中国の荘子は次のように言っています。

「同類は相従い、同声（どうせい）は相応ず。」

同じ仲間は、互いに相従い、同じ主張をする者は互いに相応じあう。これが自然の道理である。すなわち「師を同じくし、机を共にした者の親しみは、へだてのない兄弟の情に似ている。まして厳しい社会に出れば同窓は心の通う友と

なる。」と言った意味であります。

これからの多くの同窓生との付き合いは、やがて兄弟にも似た強い絆で結ばれ、必ずや皆さんの大きな支えになると確信しております。

さて、皆さんはさらなる目標に向かって日々研鑽を積まれることとなりますが、これからの人生は自らが判断し、行動しさらには責任を取ることを厳しく求められることとなります。

それは、時に大きな課題となって皆さんの前に立ちはだかるかもしれません。かかる時にこそ、学園で培われた「修道魂」と同窓との強固な絆を支えとして、様々な困難を力強く乗り越えていただきたいと念じております。

おわりに、皆さんの前途が洋々であることを心からお祈りいたしますとともに、次代に寄与する有為な人材となられますことを期待して、私のお祝いの言葉といたします。

本日のご卒業、まことにおめでとうございませぬ。

平成19年3月3日

修道学園(中・高)同窓会  
会長 大田 哲哉



祝辞を述べられる大田会長



卒業記念品  
『教学の目標を記した額』



## 人物往来

## “マツダ代表”で重責

田島 文治氏 (高19・広島アルミニウム工業社長)  
「マツダグループを代表して行ってこいと送り出された」と話すのはマツダの協力部品メーカー大手、広島アルミニウム工業(広島市)の田島文治社長。マツダの渡辺一秀前会長の後任として、7月末に広島商工会議所の副会頭に就任した。

自社の業績は好調で「マツダだけでなくアイシン・エイ・ダブリュなどトヨタ自動車グループの増産に対応」するため、新工場を相次ぎ建設するなど生産増強を進めている。「これまでは会社を元気にすることが社会貢献だと考えてきた。(今後は)公の場で働くことがどういうことか、勉強していきたい」と気を引き締めていた。

(日経 06.10.04)

熱いシュート後輩に喝  
修道中・高がOBと交流試合

広島市中区の修道中・高で15日、サッカー部の創部80周年記念イベントとして現役とOBの交流試合があった。国体や全国高校選手権の優勝メンバーら約40人の先輩たちが中学、高校の現役137人のために一肌脱いだ。

現役とOBが混成チームで対戦。GKで1961年度の国体、全国高校選手権の二冠を達成した無職坂井忠昭さん(63)=川崎市=がボレーシュートでゴールを割れば、49年の国体3位チームの社員林孝治さん(75)=広島市佐伯区=も競り合いで現役に勝った。

「(ゴール前で)迷ったら打て」「周りをよく見て」と、げきも飛んだ。

「修道ブルー」のユニホームで、全国有数の強豪として一時代を築いた。だが、最近では観音高、皆実高など同じ広島市内のチームに歯が立たないでいる。二冠当時主将だった医師若山待久さん(63)=千葉市=は「技術が高い。後は一瞬一瞬のプレーにどこまで集中できるか」と期待を寄せる。

先輩のプレーを目にした、高校2年生のDF小野塚太郎副主将は「足元の技術などがうまい。やっぱりすごい人たちだったんだな」と感心。同2年のMF岡下直裕主将(17)も「先輩たちのためにも、修道サッカーを盛り上げたい」と誓っていた。

(中国 06.10.23)

交流温か歩行横断400キロ  
タクラマカン砂漠踏破

中村憲二郎氏 (高41・専門学校講師)

中国西部のウイグル自治区にあり、世界で二番目に広いタクラマカン砂漠の単独歩行縦断に広島市西区の専門学校講師中村憲二郎さん(35)が挑んだ。約400キロ。今月3日まで18日間かけて踏破に成功した。

面積約32万平方キロと日本全土にほぼ匹敵する砂漠。南方にあるクンルン山脈のふもとに発して北へ流れるホータン川沿いのルートを選び、水量が減ると現れる河床を歩いた。9月16日、砂漠北部の町阿拉尔(アラール)を出発。予想に反して水量が多く、所によって腰まで水に漬かりながら蛇行する河床を歩いた。川の泥水に消毒薬を入れ、飲み水にした。

途中、目立った集落はなく、時折出会うのはヤギを放牧するウイグル族の男たち。泊めてもらった70歳ぐらいの老人の掘り立て小屋にあったのは、毛布や鍋だけと質素そのもの。家畜用の柵の木を燃やして、なけなしの小麦粉でナン(堅めのパン)を焼いてくれた。

終着の町墨玉では、昨年の下見の際に知り合ったタクシー運転手と偶然再会。ナンやブドウで祝福された。「現地の人にとっては最大限のもてなし。行きずりの旅人のために親身になれる心に打たれた」と振り返る。

これまでもオーストラリアの砂漠横断などの冒険を重ねてきた。「両親や職場をはじめ周囲に迷惑を掛けた分、経験を少しずつ社会に還元していきたい」と話している。

(中国 06.10.27)

## 第63回中国文化賞 受賞者の業績と横顔

土肥 雪彦氏 (高6・広島県立広島病院長)

46年間にわたる医学研究で地域に貢献してきた。日本肝移植研究会会長を務めていた時に、脳死臓器移植再開が実現。しかし、脳死の臓器移植はさまざまな議論を呼ぶなど、移植医療は幾多の壁にぶつかりながら歩む、いばらの道でもあった。

1971年、米国で学んだ手術技法を生かして中四国初の生体腎移植に成功。「あきらめムードが漂う中の手術。患者のチャレンジ精神がなければできなかった。患者は“戦友”のように思える」と振り返る。その患者が35年後の今も元気であるのが何よりもうれしい。

移植手術は広島大と土谷総合病院の医師がチームをつくって取り組んだ。「この賞は私一人のものではなく、皆の努力と結果に与えられたものだ」。このチームこそ、現在の広島大の移植医療の礎を築いたと言っても過言ではない。

91年、日本で初めて血液型が違う母子間の成人生体部分肝移植を実施。「母子の強い意志が手術に踏み切らせた」と語る背景には、慢性疾患の患者に長年寄り添って芽生えた家族同様の気持ちがあった。

教育にも力を入れる。理念は「患者の痛みの分かる医師」。大きな感受性で患者の苦しみを自分のものとして受け止めること、それこそが医師として最も大切な資質だと思っている。

夢はがん撲滅と臓器再生。そして「(患者が)少しでも希望を持って生きるには、未来に希望の持てる助言がいる」。8年前、胃がんで亡くなった妻多佳子さんに思いを重ねながら、患者の苦しみを少しでも軽減できるならと、気功を習ったりもしている。

(中国 06.11.03)

## 訃 報

松本 哲哉氏 (修道中学校・高等学校教諭：高37回)

平成18年9月27日 ご逝去 享年40歳

氏は平成3年4月1日に修道学園教諭として就任。

15年間にわたり、数学の教鞭をとられるとともに、弓道部の部長として生徒の指導、育成にご尽力された。

平成17年6月に虫垂がんに冒されていることが判明し、1年余の入院治療、闘病につとめられたが、その甲斐なく若くして不帰の客となられた。

心からご冥福をお祈りいたします。

浅野 長愛氏 (浅野家第17代当主)

平成19年1月6日 ご逝去 享年81歳

氏は修道学園の発展、郷土人材の育成に生涯をかけられた浅野長勳公の曾孫にあたられ、学習院中・高等科長、山階鳥類研究所の理事長を歴任された。

同研究所の理事長在任中には修道中学校・高等学校に於いて「鳥島のアホドリ」と題したご講演をいただいたほか、広島市神田山、新庄山にある浅野家累代の墓所を特別にご案内をいただいた。浅野家からは、修道が財政難であった時期、毎年巨額の多額のご寄付をいただいたほか、現在の千田校地は昭和6年1月に浅野家から無償譲渡されたものである。

心からご冥福をお祈りいたします。

難波 貞治氏

(修道学園同窓会連合会幹事、学校法人修道学園評議員：短3回)

平成19年2月28日 ご逝去 享年76歳

氏は平成8年3月に修道学園同窓会連合会幹事に就任され、11年間にわたり同窓会連合会の発展に寄与され、また同年5月からは卒業生選出学園評議員として永年にわたり学園の発展にご尽力いただいた。

原爆の惨禍や数度の大病を乗り越えてこられたが、昨年来入院治療、闘病の甲斐なく、不帰の客となられた。

心からご冥福をお祈りいたします。

## 事務局だより

### ◎全国制覇を成し遂げました

ワンダーフォーゲル班が全国高校総合体育大会（平成18年8月21日～24日 奈良県大峯山系・大台山系）において、男子団体では史上初の2年連続優勝を飾りました。これで4度目の全国優勝となります。



書道の全国千字文大会（公募期間：平成18年7月3日～7日）においては、最高賞の「文部科学大臣賞」と、第3位にあたる「学会理事長賞」をそれぞれ受賞しました。

また、第26回全日本学生選抜書道展においては個人高校生の部で最高賞に当たる「文部科学大臣賞」と、個人中学生の部で第2位に当たる「学会大賞」をそれぞれ受賞しました。



◎毎年5月の下旬に開催する幹事会では、評議員の皆様にご声をおかけして、同窓生各位のより一層の親睦を深めるため、懇親会を企画いたしております。

2007年度もこの企画を実施する予定でございますのでご多忙のこととは存じますが、ぜひご参加いただきますようお願いいたします。

◎平成20年3月は修道学園（中・高）同窓会、修道学園同窓会連合会の役員改選となります。

平成19年度中に役員改選についての諸手続きやご連絡を取らせていただくこととなりますのでご協力よろしくをお願いいたします。

◎会報への積極的なご寄稿、支部・同期などのご報告、ご多忙中にもかかわらずご配慮いただきありがとうございます。

今後ともよろしくをお願いいたします。